

谷澤淳三教授の急逝を悼む

基礎人間学講座・比較哲学分野 坂部 明

2月20日の朝、谷澤先生が倒れられたとの報を早坂先生から受け、一瞬耳を疑った。早速同僚の先生たちと信大病院に駆けつけたが、蘇生の願いもかなわず、12時過ぎに息を引き取られてしまわれた。まことに痛恨の極みというほかはない。ご家族の悲しみはたとえようもないが、定年を間近に控えた私にとっても、比較哲学分野を託する期待の逸材を失ってしまったという無念の思いも、一通りではない。

谷澤先生は13年ほど前に、丸山孝雄先生の定年にもなる公募に応じられ、40数名の応募者の中から最優秀の評価を人事委員会より得て、教授会にて採用決定がなされ、東京大学助手より信州大学に配置換えとなった。当時、人事委員会の委員長を務めさせていただいたので、その間の事情は今も記憶に新しい。谷澤先生は、インド古典の文法学、言語論を西洋の論理学や言語哲学の方法論を用いて解明するという、新しい比較哲学の分野を開拓された、この分野では名だたる学者とあってよいであろう。谷澤先生の今日までのご業績が近くまとめられて、春秋社より出版される運びと仄聞するが、完成されることを切望する次第である。

また一方、先生が赴任されてからの学生指導は、まことにみごとなもので、学生との世代間格差が年々広がる私としては、しばしば多くの場面で谷澤先生に学生指導をお願いしてきた。

後にお見えになった早坂俊廣先生とは名コンビで、たのもしいかぎりであった。学部全体の学生指導という観点からも学務委員長の要職を務められ、学部の期待は大きなものがあつた。このような意味においても、谷澤先生を失ったということは大きな損失であると言わねばならない。

研究者としても、教育者としてもすぐれた谷澤淳三先生を、このような形で失い、お別れするとは夢にも思わなかった。終生の痛恨事である。願わくば、谷澤先生の御霊（みたま）安らかならんことを衷心より祈念する次第である。